

教室

長谷川美緒

ぱりぱりぱり。怒ったように空が鳴る。誰もそんなことには気づかないふりをして教科書の音読を聞いている。声がとても小さい。ぜんぜん聞こえない。でももっと大きな声で、と頼んでしまったら、空の鳴いているのをみとめることになるから、やっぱり誰も何も言わない。先生は机と机のあいだを注意深く歩き、窓のほうには目をやらないようにしている。

どごーん、と重いものの落ちる音がして地面が揺れる。青白い光の帯がまだらにガラスの上をはしる。窓が震える。

「デンキウナギだ」「おおきいぞ」「バケモノナマズじゃないかな」「なんだよそれ」「知らないのお?」。蛍光灯が消える。悲鳴があがる。落ち着いて授業中ですよと先生が言う。先生には見えないのかもしれない。灰色のはらをのたくらせ、校舎を絞めつける巨大な生きもの。ぬめったからだか窓ガラスをいっぱい塞いでいる。雨が降って、降って、降って、蓄電と放電を繰り返す。音読が再開される。

わたしたちはもう帰れないだろう。

順番に一行ずつ、教科書を読む声が迫ってくる。わたしはしゃくりあげる。文字を追うことができない。音読は止まる。教室全体が止まる。横隔膜の震える音だけが染みのように発生して、広がる。

蛍光灯が点く。バケモノナマズの尾が名残惜しそうに、何度かぴしゃぴしゃと窓を叩く。先生は困ったようにわたしの机の横に立ち、震えが静まるのを待っている。